

教材・支援機器活用実践事例

【音環境を整備し、良質な音声を確実に届けるための工夫】

子どもについて	学校・学級	小学校 特別支援学級（難聴）	
	対象の障がい	聴覚障がい（伝音性難聴）平均聴力 右 73.8 dB 左 55.0 dB 構音障がい（口唇裂、小顎症、軟口蓋裂、後鼻孔狭窄）	
	授業形態	交流及び共同学習（通常の学級での集団学習）	
学習上又は生活上の困難さ	子どもの特性や教育的ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 聴覚障がいに関しては、中等度難聴で、伝音性難聴であるため、補聴器の装用効果が高い。音環境がよい場合、語音明瞭度は高い。ただ、聞き誤りがあり、単語の綴りを間違えることが頻繁にみられる。 ○ 構音障がいに関しては、発音がすべて鼻音化してしまうため、不明瞭に聞こえる。特に、破裂音や摩擦音などの発音が困難である。 	
教材・支援機器活用	使用した支援機器・教材の名称	線音源スピーカ (デジマスター 7000)	机と椅子の脚カバー
			
	活用のねらい	補聴器を装用しているため、音環境を整備し、S/N 比（Signal/Noise 比：話し声、聞かせたい音、聞いてほしい音と騒音の大きさの比率）を改善する必要がある。そのため、「机と椅子の脚カバー」は、床と椅子や机の擦れる音を防止するために着用している。また、「線音源スピーカ」を使用することで、距離による音の減衰と音の反響を減らし、良質な音声を確実に届けるために使用している。	
授業における支援	教材の配慮事項	授業の際には、マイクを着用し、難聴児はもちろん交流及び共同学級を行う学級の児童に対しても教師の声を確実に届けるようにする。	
子どもの変容や評価		線音源スピーカの使用により、聞き誤りが減った。今後、騒音計による S/N 比の測定により、相関関係を明らかにする。	